

日本ホスピス在宅ケア研究会inとがち  
シンポジウム「医療と福祉のコラボレーション」

若年がん患者と取材者の  
経験から

2012年9月9日

朝日新聞東京本社・上野創(はじめ)

## 上野創・プロフィール

- 1971年生まれ。東京都府中市育ち。41歳。
- 94年、朝日新聞入社。長野、横浜支局で事件を担当。
- 97年11月、**26歳で精巣腫瘍**の告知。治療を受ける。
- 2年連続で肺に再発。手術と抗がん剤で治療。00年秋から神奈川版で手記「**がんと向き合って**」を連載。
- 03年秋に**社会部**へ異動。学校・**教育**政策担当、天声人語補佐、宮城岩手内陸地震、秋葉原殺傷事件のほか、自殺対策など、「生と死」をテーマにした記事を執筆。
- 2010年秋は夕刊連載「**がん、その先へ**」を担当。
- 2011年3月～5月、宮城県で**東日本大震災**の取材。
- 5月に販売局へ異動。朝日新聞の販売戦略を考え、若い世代に新聞の魅力や役割を伝えるのが目下の仕事。<sub>2012/9/7</sub>

## 経緯

- ・26歳、入社4年でがん(精巣腫瘍)告知  
→働き盛り、想定外、混乱
- ・すでに肺全体に転移→事態は深刻に
- ・プロポーズされて入籍→家族(+親、妹)
- ・インフォームド・コンセント→「最悪の場合」の話を受け止めなければならない
- ・絶対に治して復帰をめざす→でも「最悪」が現実になったら「ホスピス」を希望



# 「ホスピス」と言ったときの心理

- 単語にためらい
- いま、言っておかなくては
- 死にゆくプロセスへの恐怖
- ずっと病院、に拒否感
- 最期を自分らしく
- 死期が早まっても良い
- 家族の不安感は心配



# 治療の経緯

- 手術は簡単、抗がん剤で厳しい副作用
- 激しい吐き気、嘔吐、発熱、震え、しびれ
- 骨髄抑制、腎機能低下、肝機能悪化
- 超大量化学療法で感染、肺水腫、臓器不全
- 予期不安がつのもろ・抑鬱状態に
- 「生きたい、でも死んだら楽だろう」
- 「死に方」の話は家族にはできない
- 揺れながら治療を受けるのがリアルな心理

先に対する不安・恐怖／家族への遠慮・すまなさ  
弱い自分に直面・絶望が怖い／医療者への遠慮



# Tくんのケース

## 41歳、ホスピスで死去

- 視覚障害→がんで全盲に・でも自立し就労続ける
- 脳内転移、左半身が麻痺、独り暮らし断念
- 駅上のマンション借り、「帰る」を前提、希望
- 転移が進む、老親の介護力に限界→緩和ケア病棟へ、帰宅は困難か
- 想定以上に回復→病院から「転院を」
- 転院先での扱いに家族の不満→食べさせない
- 某大学病院の緩和ケア病棟で穏やかな最期

# Yさんのケース

40代、小学生の娘と夫

- 卵巣がん、「完治は難しい」
- 早めの緩和チームとの関わりを助言  
→「私、やっぱり死と向き合えない」（誤解）
- 病状悪化、苦痛増大→近くの診療所と関わり  
病院の緩和ケアチームとも接点・在宅で穏やかな日々→「夫は受け入れられないのよ」
- やせて体重が30キロ台半ばに  
→「もう家は無理。家族が限界」。緩和ケア病棟に

# 上野のケース・生きたいと願う背後には

## ■ 大切な人の存在

両親／結婚を決意してくれた妻／妹／友人・同僚

## ■ 仕事上の気づき・後悔・決意

記者としての仕事→まだ何もしていない  
体験・気づきを生かして記事を書きたい

## ■ 人生の不全感・不完全燃焼

がんによって支配されて終わりたくない  
世の中に、何か遺したい



# 死と向き合って

## ・死の何が怖いのか？

- A・自分という存在が消える恐怖
- B・独りぼっちで死んでいく恐怖
- C・すぐ先に何が起こるか分からない恐怖
- D・痛み・息苦しさなど肉体的な苦痛の恐怖
- E・自分が思う自分らしさを失う恐怖
- F・他人の世話がないと暮らせない恐怖
- G・大切な人と永遠に別れる恐怖

# がんと向き合って学んだこと

- 自分の弱さや情けなさに直面
- 日常の価値、日常の浪費→めぐる季節の中で
- 一生という時間はない→振り返って道がある
- 中世欧州の「メメント・モリ」=死が前提の生
- 希望とはなにか→生き続けたい？無理なら？

**がんも人生の一部：全てを支配されたくない  
きれいな事では済まないが、不幸だけではない**



# 最期に向かって生きる

- 治す希望はあっても死と向き合う(準備)
- 緩和ケアチームもさまざま  
→ 事前のリサーチが必要
- 「軌道修正もありえる」を前提に
- 「家族」と「本人」の覚悟、地域の資源、  
その情報がカギ→

医療も福祉も使い倒そう